

# 大阪南泉州地域の商業発展史

——岸和田、貝塚、泉佐野を中心に——

The history of commercial development in South Osaka

中尾 清\*      松崎 克彦\*\*      百武 仁志\*\*\*  
NAKAO Kiyoshi   MATSUZAKI Katsuhiko   MOMOTAKE Satoshi

This paper analyzed the commercial history of South Osaka. The history of this area has not been clarified. Incidentally, South Osaka is called the "Sensyu area". We targeted South Sensyu for our report. In addition we looked at Osaka's historical district (1) before modern commerce (until the Edo period), (2) during the rise of the Terada family and the development of commerce, (3) during the wartime period and postwar period, (4) from high economic growth to the collapse of the economic bubble. This paper compiled the history from the point of view of the authors. We think, if we discover a new report, that we may change our point of view.

キーワード：南泉州（South Sensyu area）、寺田財閥（Terada financial clique）、商店街（Commercial district）

## 1. はじめに

本稿は泉州地域の中でも岸和田市以南の南泉州地域の商業発展について明らかにしたものである。この南泉州地域は泉南とも呼ばれ、泉南地域広域行政推進協議会が設置されている地域であり、岸和田市、貝塚市、熊取町、泉佐野市、田尻町、泉南市、阪南市、岬町の 5 市 3 町<sup>1</sup>から構成されている。歴史的には令制国の和泉国に由来する地域名称であり、713 年の諸国郡郷名著好字令によって国名を 2 字にする必要が出たため、和泉という名称に変えたが地域名の泉州はそのまま残ったといわれている地域である。

この地域、商業に関して注目を集めたのは廻船業が盛んであった江戸時代である。しかし、今日的な意味での商業は、江戸時代、酒造業をしていた寺田家が明治時代勃興し、地方の有力財閥にまで成長したことで注目を集めた。この寺田財閥の創始者を寺田甚与茂というが、この寺田甚与茂に関しては昭和期に中澤米太郎が研究しており、研究成果が岸和田市立図書館に所蔵されている。また、寺田財閥が設立した岸和田紡績に関して、労働問題の観点から複数の研究が残っている。

本稿ではこれらの歴史的経緯を踏まえ、まず、江戸時代については廻船業を取り上げた。ちなみに中澤米太郎が指摘しているように、明治期から大正期にかけて、泉州の経済を寺田家が握っていたため<sup>2</sup>、明治期から大正期にかけての研究は寺田財閥の研究を中心とした。ただ、寺田財閥の主力は紡績業と銀行業である。そこで紡績業

などの第 2 次産業は本稿の対象外となるため参考程度に留めた。また、岸和田紡績の労働問題の研究において、出稼ぎ労働者の営みが商業と関連付けられる部分があるため、その点も商業史の中に組み込むこととした。さらに財閥解体後は寺田財閥の影響が低下するため、商店を中心とした商業を明らかにした。

なぜこのような流れになったのかというと、研究にあたって行った文献サーベイの結果、南泉州地域の商業を体系的に分析した研究は確認することができなかったため、独自の研究が必要となったからである。

結果として南泉州の商業史は次の区分になると判断した。①近代商業勃興以前（江戸期まで）、②寺田家の勃興と商業の発展、③戦時期及び戦後の混乱期、④経済成長から関西国際空港開港までである。本稿はこの流れに沿って進めていくものとする。

## 2. 近代商業勃興以前（江戸期まで）

### (1) 廻船業の発達

南泉州地域には全国的に有名な豪商が明治時代まで存在した。この豪商とは廻船業で財を成した食野家や廣海家である。南泉州の政治の中心は岸和田藩であったことは間違いないが、江戸時代後期になるとこれら豪商が岸和田藩や紀州藩などに大名貸を行なうほど大きくなった。本節では食野家や廣海家などの商家を明らかにするため、わが国における廻船業について行われた研究を取り上げ

\*大阪観光大学名誉教授   \*\*大阪観光大学観光学部   \*\*\*大阪観光大学観光学部

るとともにその発展を明らかにする。

この廻船業の研究についてサーベイを行うとある程度の蓄積があることが分かる。具体的には次の通りまとめることができる。古田良一は、「瀬戸内海の水運は太古の世に開け、時代の下るに従ひ益々盛となれり<sup>3</sup>」と述べ、大阪地域での水運の起源が瀬戸内海にあるとした。そして江戸時代に入ると政商、河村瑞賢が阿武隈川河口から本州沿いに南下、房総を迂回し、伊豆半島の下田へ入り、西南風にのる東廻り航路や奥羽山脈を隔てた最上川の水運を利用し、河口の酒田で海船に積み換えて日本海沿岸から瀬戸内海を廻り、紀州半島を迂回して下田に下り、西南風を待つて江戸に至る西廻水運を確立したことによって、廻船業が劇的に発展していった。なお、柚木学は『近世廻船業の発展とその運営』の中で、古島敏夫を引用し、「江戸時代の交通の特色は、陸上交通が東海道を始めとする五街道を中心に、人の交通を主とし、幕府や諸藩の公用のために使用せられたのに対し、水上交通は主として城米や諸藩の貢租米の輸送の必要から発達し、やがて城下町都市を中心とする物資輸送に供せられたという点に求められ<sup>4</sup>」とした。

この発展によって、大坂や兵庫（摂津国）にとどまらず、その周辺であり、港があった他地域、本稿の場合には佐野や貝塚で廻船業が盛んに行われるようになっていった。このような理由から南泉州の商業は江戸時代、廻船業が中心となっていた。

## (2) 食野家

食野家に関する研究はあまり多くないが、佐野史談会が編纂した食野家関係資料<sup>5</sup>などがあり、泉佐野市内で刊行されている多くの文献に登場している<sup>6</sup>。また、本学の前身である大阪明浄大学でも、2006 年に勝矢寛雄が、「泉州新風土記 泉佐野編(その 1)」として食野家についての研究を残している<sup>7</sup>。これらの文献をサーベイすると食野家には次のような歴史があることが分かる。

佐野史談会の主要メンバーである池田谷久吉によれば、「江戸時代の小説などに、「和泉の長者でメシ(食事)にしようか」(中略)食家は天下に有名であった<sup>8</sup>」。

泉佐野市は先の大戦で甚大な戦争被害を受けておらず、古いものがそのまま残っている町であり、1950 年には既にこのような文献が登場していたものの、「今日となつてはその事蹟を調べやうとしても(中略)殆ど資料のよるべきものが無い<sup>9</sup>」と書き記されている位、資料が残っていない。これは大名貸しの貸付金が廃藩置県によって回収できなくなってしまう豪商が衰退したため、資料が散逸してしまったものと考えられる。

なお、古妻嘉蔵は 1910(明治 43)年頃から岸和田実業新聞に「食家と佐野と海」などを執筆したとのことであるが、その中で、食野家の血統について、「楠公の末裔であると称して居る<sup>10</sup>」と書き残している。

ちなみにこの食野家が天下に名前を知られるようになったのは、実は廻船業ではなく、諸藩用立金に始まる御用金によってである。時期的には 1682(天和 2)年 10 月 28 日に食野次郎左エ門が岸和田城に伺候して以降のことではないかと考えられている。

## (3) 廣海家

南泉州地域の商業で江戸末期までに有名となったのは前項で述べた食野家など、現在の泉佐野市の豪商であるが、その近隣にも廻船業で財を成したものがいた。それが現在の貝塚市に存在する廣海家である。この廣海家は古文書が市に寄託されたこともあり様々な研究が行われている。ちなみに代表的な研究者には赤路洋子や中西聡がいる<sup>11</sup>。

廣海家住宅 図表 1



(筆者撮影)

廣海家は浄土真宗願泉寺の寺内町で、1835(天保 6)年に、この地を支配していたト半家より諸色問屋開業を仰せつかった<sup>12</sup>ことから歴史の表舞台に登場した<sup>13</sup>。その後、廣海家は西廻り航路で米などを移入した結果、二万石以上もの米が貝塚で移入販売されるようになった<sup>14</sup>。そしてこの米は、「南和泉全域と、西之宮、和歌山という広域に<sup>15</sup>」流通していた。その後、明治維新以降、扱っていた石高は十分の一に減少、1883(明治 16)年には海運業から撤退したが、貝塚銀行など地元企業の設立にも積極的に関わるなど、泉南地域の近代化にも大きく貢献した<sup>16</sup>。

#### (4) 廻船業の衰退

江戸末期、財政が逼迫した各藩は商人などに資金の用立てを求めた。しかし、1871 年の廃藩置県によって藩はこの債務への支払いができなくなった。明治政府は藩に代わって債務の支払いを行う責任を負ったが、事実上債務の支払いができなくなった。このため、南泉州の廻船業は本業ではなく貸付金が回収できなくなり、没落の一途をたどることになる。

そして長者番付にまで記載され、全国にその名を轟かせた食野家の自宅も 1872（明治 5）年に第一小学校として佐野町に買い上げられることになった。

いろは蔵と食野家跡地 図表 2



（筆者撮影）

### 3. 寺田財閥の勃興と南泉州地域の商業の発展

#### (1) 寺田家の系譜

寺田家は江戸時代、酒造業を営んでいて、三代目当主の寺田勘兵衛が死去すると当主となった寺田甚与茂及び寺田元吉、寺田利吉がそれぞれ分家し引き続き酒造業を営んだ。ちなみに寺田甚与茂が南寺田家、寺田元吉が北寺田家、寺田利吉が堺寺田家と呼ばれたが、明治時代、南寺田家は岸和田紡績、岸和田煉瓦綿産業を設立、商業面でも和泉銀行、和泉貯蓄銀行など地域商業に影響のある企業を設立していった。また、北寺田家では関西製鋼、東洋麻糸紡績を設立、更に泉州織物を傘下に収め、佐野紡績も営んだ。そしてこれらを合併し帝国産業株式会社を運営した。これらは現在の貝塚市が中心の企業である。最後に堺寺田家は寺田紡績工廠や寺田工業を中心に据え、商業としては寺田銀行を運営していた。

なお、寺田財閥の中心は寺田合名であり、1920（大正 9）年 12 月に設立された。この寺田家躍進のきっかけとなったのは第五十一銀行の設立である。また、今日の寺

田家については、岸和田市で調査したところ<sup>17</sup>、岸和田市内に「元朝」というブランドの日本酒を販売する有限会社寺田酒造が存在していることが分かった。なお、中澤米太郎が指摘しているように、近代以降の岸和田や泉州地域への寺田家の影響は大きく、第 2 次世界大戦がはじまるまでは泉州地域の経済を支配していたと言っても過言ではない<sup>18</sup>。このため、現在でも岸和田市には自泉会館や五風荘など、寺田財閥所縁の建築物が残されている。

自泉会館

図表 3



（筆者撮影）

#### (2) 第五十一銀行の設立

明治維新の影響で戦費がかさんだ明治政府は地域の有力者の資産を活用しようと為替会社を設立した。この為替会社は東京・大阪・京都・横浜・神戸・大津・敦賀に設立されていた。しかし、その後、1871 年 7 月に行われた廃藩置県による収納米・貢租米引当貸付および諸藩物産元方仕入金貸付の消滅が為替会社の信用を大幅に下げた<sup>19</sup>。新保博は、この結果、大阪でも「東京と同様、大阪為替会社に代わるものとして第三国立銀行の設立が、大阪為替会社を構成していた山中をはじめ大阪の豪商を中心として企てられ<sup>20</sup>」たと、第三国立銀行誕生を分析している。

そして南泉州地域でも第五十一銀行が 1872（明治 5）年 11 月に公布された国立銀行条例に基づいて誕生した。ちなみに新保博は、「国立銀行条例」は「官営工場」方式による保護主義的殖産興業政策の段階に対応するものであった<sup>21</sup>とし、明治政府も政策的に国立銀行の設立を促したと分析した。このような明治政府の政策とも相まって、第五十一銀行が寺田財閥内の企業に資金供給を行



うようになり、寺田財閥は地方財閥として頭角を現すことになった。なお、南泉州地域では第五十一銀行以外にも泉陽銀行、寺田銀行、尾崎銀行などをはじめとして多くの銀行が誕生していった。

その後 1897 (明治 30) 年になると、南海本線の堺駅から佐野駅 (現在の泉佐野駅) が開通する。寺田財閥は鉄道業や電力業など多角化を行っていったため<sup>22</sup>、また、鉄道である南海本線が開通したことから人々が容易に南泉州地域を移動できるようになり、佐野 (現在の泉佐野) の商店街も徐々に発展して行くことになった。特に工場労働者の買い物や娯楽などは商店街を中心に行われるようになり、旧孝子越 (紀州 (浜)) 街道沿いには多くの商業集積ができて行くこととなった<sup>23</sup>。

このような歴史を振り返ると、寺田財閥、特に第五十一銀行の設立によって、寺田財閥を資金面で支えることができたことから、岸和田紡績をはじめ多くの企業が南泉州地域で成長し、この成長に伴って、また、南海本線が和歌山まで通じていったことによって、人の流れや商流が活発になり、南泉州地域では商店街をはじめとする商業が活発化していったものと考えられる。

### (3) 出稼ぎ労働者が形成した町～いわゆる朝鮮町～

寺田財閥が保有していた岸和田紡績に関する研究として大正年間に起こった朝鮮人労働者による労働争議の研究がある。これらの文献をサーベイしてみると、岸和田紡績の付近に朝鮮人住宅<sup>24</sup>があり、その場所を含んだいわゆる朝鮮町が形成されていたことが分かった。朝鮮総督府庶務部調査課がまとめた『阪神・京浜地方の朝鮮人労働者』には、「欧州大戦の影響を受けて内地工業界が勃興するや (中略) 岸和田紡績にては朝鮮女の採用に着眼し、大正 7 年 3 月 (中略) 50 人の朝鮮女を募集<sup>25</sup>」したと記載されている。これは内地人女工よりも低廉で食事、住宅等に美味佳良を望まなかったことが好まれたためであった。また、工場管理者として各分社に朝鮮人監督を雇い入れるなど、本格的に朝鮮人女工を雇い入っていた。なお、食事に関しては「朝鮮式に若干日本食を加味したもの<sup>26</sup>」が多かった。

住居に関しては岸和田紡績で働いた朝鮮人女工、はじめは下宿が多かった。その後、春木の岸和田紡績社宅に多く住むようになった。そしてさらにその社宅に無料で住むようになり現在に至った (資料が作られた大正 13 年の話) ということであった。このような岸和田紡績による朝鮮人女工の採用が岸和田でいわゆる朝鮮町が生まれる原因になった。

ちなみに青木・伊坂論文<sup>27</sup>によれば、そこに暮らす朝鮮人は日常的に明太や唐辛子を食していた。朝鮮総督府の資料からも朝鮮人女工は朝鮮服<sup>28</sup>や朝鮮式の食事をしていたということであるので、朝鮮人女工向けの商品を扱う商店が存在した可能性を踏まえ調査を行った。金賛汀や藤永壮、鄭富京をはじめとして岸和田紡績と朝鮮人女工の労働問題に関する研究が多い中<sup>29</sup>、筆者らは李明哲や樋口洋一、鄭祐宗にヒアリング調査をした<sup>30</sup>。その結果、忠岡町、泉南市、堺市に朝鮮人女工向けの商品を扱った商店 (及び行商) があったことが判明した。この中でも泉南市にある岡崎商店がまだ調査可能であるということであるので泉南市商工会に確認した。しかし残念なことに現在は店をたたんでしまっていた。このようなことで岡崎商店にヒアリング調査ができなかったが、南泉州地域にかつて存在した特徴的な商業として本稿ではいわゆる朝鮮町について取り上げておく。

なお、元々朝鮮人女工は済州島出身者が多かった。しかし、日本が第 2 次世界大戦で敗戦した後、朝鮮人女工の殆どは帰国してしまった。ただ、1948 年に済州島で起こった韓国軍による島民虐殺事件「四・三事件」や朝鮮戦争によって舞い戻ってきた元女工がいるらしい。今後も元女工の子孫などと接触する機会を求め、いわゆる朝鮮町における商業流通について明らかにしていきたいと考える。

### (4) 寺田財閥を中心とした南泉州の商業

江戸時代末期までは南泉州地域の商業の中心は廻船業であった。しかし、明治維新以降、第 2 項でも述べたように、第五十一銀行設立後、寺田財閥は順調に拡大していった。特に南海本線延伸に積極的であった寺田家の影響で南泉州地域の商業が活発化していった。また、このようなことから寺田財閥は南泉州地域の中核としての地位を確固たるものとしていった。そして岸和田市では旧紀州街道沿いにあった商家が衰退の一途を辿っていたのに代わって寺田財閥の企業や南海本線の駅を中心とした商店へ商業の中心が移行していった。当初は地元や内地、特に西日本地区の労働者への商いが活発であったが、第 1 次世界大戦後の経済成長に伴い低廉な労働力を求めて朝鮮半島など、外地で募集を行ったことから朝鮮人労働者が増加し、それに対応した商いも増加したことから南泉州地域はそれまでにない異文化が芽生える商業が形成されていった。

このようなことから、中澤米太郎が指摘しているように、寺田財閥は泉州地域の経済に、また例外なく商業に

も強い影響を与えていたと考えられる。

#### 4. 戦時期及び戦後の混乱期

##### (1) 戦時統制下の南泉州

寺田財閥が保有していた第五十一銀行は、1930（昭和 5）年になると岡田銀行を買収、その後 1940（昭和 15）年に和泉銀行、貝塚銀行、岸和田銀行、寺田銀行を合併し、阪南銀行を成立させるなど精力的な活動を行っていた。

しかし、1937 年に起こった盧溝橋事件に端を発し日中戦争が泥沼化する中、1938 年には国家総動員法、1941 年には重要産業団体令、1942 年には企業整備令が発せられ、南泉州地域でも企業の整備が行われていった。まず、寺田財閥の中核企業であった岸和田紡績が第 1 次企業整備によって大日本紡績に合併された。そしてその後、寺田紡績が大日本紡績に合併された。このようなことから事実上、寺田財閥の基幹産業は消滅していった。この大日本紡績はその後社名をニチボー、さらにユニチカと変更して行くが、ユニチカ百年史<sup>31</sup>には当時の様子が記載されている。

結局、その後複数の銀行を買収したものの、終戦間際の 1945（昭和 20）年 7 月に住友銀行に合併され寺田財閥が戦時体制下で変貌して行くことになった。また、「国民精神総動員」に代表されるように<sup>32</sup>、戦時体制に移行する中で、倭約が推奨され、配給制になると商業も停滞して行くことになった。更に 1942 年のミッドウェー海戦以降、戦局の悪化とともに物資不足が顕著となり、配給制そのものが破綻状態になると、正規ルート以外の商流で商品が流れて行くことになり経済は混乱を極めた。

##### (2) 財閥解体令と寺田財閥

第 2 次世界大戦後、わが国は連合国の占領下に置かれるが、そこで断行されたニューディールの解決策は富の分配でもあった。そしてその解決策の一つに財閥や大企業の解体があり、GHQ は財閥解体を実施した<sup>33</sup>。この財閥解体とは、勅令第 657 号「会社の解散の制限等の件」であり<sup>34</sup>、1946 年から 1952 年にかけて行われた。周知のごとく、4 大財閥を皮切りに 5 次指定まで行われた。先にも述べた通り、寺田財閥内の岸和田紡績と寺田紡績は 1942 年の企業整備令によって大日本紡績に整理統合されていたが、第 2 次指定で解体されることとなった（但し、それ以外の寺田財閥の企業が解体されたかどうかは不明）<sup>35</sup>。この戦中と戦後の混乱と、寺田財閥が保有していた銀行が全て住友銀行に吸収合併されたことにより、

明治時代以降地方財閥として泉州地域の経済を握ってきた寺田財閥は没落していくことになった。

現在、寺田家の名残として元朝（寺田酒造）が岸和田市内で販売を行っているほか、岸和田市内に第五十一銀行の看板などが残るのみとなっており、南泉州地域の商業の中心は寺田財閥からより広い商店に移っていくことになった。

岸和田市に残る銀行の建物 図表 4



（筆者撮影）

##### (3) 戦後混乱期の南泉州の商業

大阪は他の主要都市と同様、空襲を受け軒並み焼け野原となってしまった。南泉州地域は空襲を受けたものの東京大空襲のような甚大な被害は受けていなかった。このため古い街並みがあるまま残ることになり、大正期に発達した商店街もそのまま残ることになった。その後、第 2 次世界大戦後の食糧難の時代になると、春日公園（泉佐野市）で闇市が行われるようになった<sup>36</sup>。

ちなみに、闇市とは「その違法性とは裏腹に、国民の生活を支え、1946 年春頃に全盛期を迎える。（中略）戦後復興特有の空間<sup>37</sup>」であり、日本全国で行われていたことから、泉佐野市で行われていたということは容易に想像ができる。

##### (4) 今日的な商店街の位置づけ

戦中の企業整備や戦後 GHQ の財閥解体などの影響により、南泉州地域の経済を支配していた寺田家が没落していくと、旧寺田系や新興の繊維系の企業が南泉州地域を支配するようになって行った。すると南泉州地域で注目を集めていく商業は商店街に変化していくことになる。この商店街で有名なものが南海岸和田駅前商店街、

南海貝塚駅周辺商店街、南海泉佐野駅周辺商店街である。

満園勇によれば、商店街は「全体の利害調整が原理的に難しく、組織としての活動がそもそも得意ではない」もので、「商店街は自然発生的な商業集積であって、業種・規模・能力・意欲・資源がバラバラな商店の集まりであり、それぞれは独立した自営業者として自律的な経営を行っている<sup>38)</sup>」というものである。既に明らかにした通り、泉佐野市、貝塚市の地域は江戸末期まで食野家や廣海家などの豪商が存在していたことから商業が盛んな地域であった。この豪商が没落していったから、寺田家を中心に明治期を経て大正期には商店が自然発生的に集積していた。つまり、「自然発生的な商業集積という「場」<sup>39)</sup>」としての商店街が数多く存在し、戦後再スタートを切った南泉州地域の繊維産業で働く労働者や地域住人を支える重要な場となっていた。そこで次章では、「1950 年～70 年代には全盛期を迎えたが、1980 年代半ばから 1990 年代には、衰退傾向が明確なものとなった<sup>40)</sup>」という、地域の中心であった商店街について明らかにしていく。

## 5. 経済成長期から関西国際空港開港まで

### (1) 高度経済成長期の南泉州

朝鮮戦争によって米軍の後方基地として機能したわが国は好景気に沸くことになる。南泉州地域でも、戦前まで産業の中心であった紡績業などに変わって繊維産業が発展していった。このため、これらの企業で雇用されていた労働者が普段生活するために必要なものを購入したり、休日の娯楽を求めたりして再び地域の商店街が活況となっていた。この時代は南海岸和田駅前商店街や南海貝塚駅周辺商店街、南海泉佐野駅周辺商店街など、多くの商店街の規模が拡大していった。

このようなことからここでは商店街の発展を中心に南泉州の商業を概観する。なお、戦後の商業史を紐解く重要な手がかりとしては、各自治体の市政史、商工会議所がまとめた歴史などがある<sup>41)</sup>。ただ、調査したところ、商店街についてはとりわけ泉佐野の資料が多く残されていることから、今回、泉佐野の商店街を中心に明らかにしていく。

なお、図表 5 は泉佐野市内で最も大きい商店街（現：本（つばさ）通り商店街）の写真である。北山理が執筆した百人の佐野の物語から筆者の許可を得て転載したものであるが、南泉州地域は北泉州地域や大阪市内と異な

り、大きな戦災を受けなかったことから（米軍の B29 によるじゅうたん爆撃など）商店が軒を連ね活気があったことが分かる。

泉佐野本（つばさ）通り商店街 図表 5



（百人の佐野物語より筆者許諾を得て転載）

当時は戦前からある芝居小屋などもまだ複数存在し、また、映画館なども存在した。さらにこの当時、各家庭に風呂はなく各地域に多くの銭湯が存在した。このことも商店街に人が多く集まっていた一つの要因であったのではないかと考える。

### (2) 安定成長期の南泉州

この時期になると全国的に商店街全盛時代となる。南泉州地域の有力な商店街ではアーケードを導入する。ここで特徴的なのは南海岸和田駅前商店街である。だんじり祭は泉州地域を代表するお祭りであるが、毎年、南海岸和田駅前で行われている。これは商店街にとってとても良い集客イベントとなっている。実際、我々は毎年、南海岸和田駅前で行われるだんじり祭のパレードの学生清掃ボランティアスタッフの引率をし、学生とともに参加している。2018 年もスタッフとして参加したが、だんじり祭の時はとても多くの人が集まっていて、商店街への集客には抜群の効果を果たしていることを目の当たりにしている。ちなみにだんじり祭で曳行される地車の高さは約 4m、そこに人が立って乗ることから、祭りの際は 6m 程度の高さが必要である。この地車はパレードを行う南海岸和田駅前まで岸和田駅前商店街を通り抜けることから、岸和田駅前商店街はアーケードの高さをだんじり祭に影響がない高さとした。このため、他の



商店街よりアーケードが高いという<sup>42</sup>。

また、南海泉佐野駅周辺にあるつばさ通り商店街もこの時期アーケードを導入する。このことによって、雨天でも安心して買い物が楽しめるようになった。ヒアリング調査では両商店街とも週末は道が歩けないくらい混んでいたということであった。なお、この時代は「大規模小売店舗における小売業の事業活動の調整に関する法律（1973 年に成立）」（以下、大店法）があった時代でもあり、1990 年位まで商店街は南泉州の商業の中心となっていた。

### （3）バブル期の南泉州

衆知のごとく、1980 年代は日米貿易摩擦が起こっていた時代であり、非関税障壁とされたものは政治的交渉の材料となった。米国の大規模流通小売業の日本進出に際し、小売店を保護しているいわゆる大店法がやり玉に上がり、1991 年には大店法が改正され、これまで商工会議所に置かれて大型店の出店を扱ってきた商業活動調整協議会が廃止されることになった。このことを受けて南泉州地域でも、ロードサイドショップなどの都市近郊型大型ショッピングセンターが誕生することになった。また、経済成長とともに宅地開発が進み、駅から離れて暮らす人々が急増していたことや自動車普及していたことから、明治時代から自然発生的に成立していくことが多かった南泉州地域の商店街は都市近郊型大型ショッピングセンターとの競争が激化していくことになった。

そこで南泉州地域の商業の主役の座についたのが大型ショッピングセンターである。これは全国的にも同様のことが言えるため、南泉州を代表する特徴のある商業と言うわけではないが、イトーヨーカドーやイオンなどが出店していったことにより、地域の特色があまり出ない、全国と同じような商業発展の道を歩むこととなった。

ただ、南泉州地域の場合、この全国的な商業発展とは一味違う発展の可能性が出た。それが 1987 年に着工した関西国際空港の存在である。

### （4）関西国際空港開港

バブル経済に沸く日本経済の中で、大阪も例外ではなかった。経済成長に伴って増加する航空需要を伊丹空港だけで賄えなくなってきたことから、関西の第 2 空港の建設が提起されるようになった。この際、大型で騒音が大きなジェット機の受け入れができるようにと海上に空港を設置する案が 1968 年から検討され、1987 年、南泉州地域の泉佐野市、田尻町、泉南市沖に空港を作るべく工事が着工した。

地元の人々にインタビュー調査をすると、この海上に

浮かぶ関西国際空港へのアクセスは 2 本、空港の北側にある鉄橋と、南側の海底に建設する地下トンネルであった。しかし結局南側の海底トンネルは 2018 年現在も工事を着工する様子すらない。なお、現在完成しているのは空港北側の鉄橋のみである。この空港建設とアクセス道である鉄橋の建設によって、対岸の泉佐野市の商業は大きく変わることになる。

まず、アクセス道の鉄橋で泉佐野市側にはあべのハルカスが完成する 2014 年までは日本で 2 番目に高いりんくうゲートタワービルが建設された<sup>43</sup>。このりんくうゲートタワービルの当初計画では同様のビルをもう一棟建設し、関西国際空港から大阪に入るゲートのような形にする予定であった。また同時に造成された空港の対岸、りんくうタウンは長らく空き地ばかりの状態になっていたが、2000 年にりんくうプレミアムアウトレットモールが開設された。

関西国際空港 図表 6



（筆者撮影）

このような南泉州地域であるが再び商業の盛衰が起こっていく。衰退としては特にバブル経済崩壊以降、衰退が顕著になっている商店街が多い。本学の学生が百武ゼミで地域のフィールドワークを行なっているが、特に南海泉佐野駅周辺商店街や南海貝塚駅周辺商店街の衰退は顕著である。

写真からも分かるように、泉佐野市内で最も賑わっていた商店街が、平日の日中であるのにも関わらず、シャッター街化し、人が殆どいない状態である（なお、近年はインバウンド観光客の宿泊利用者が急増しているため、

現在の本（つばさ）通り商店街 図表 7



（筆者撮影）

南海泉佐野駅駅上商店街などは多少賑わっているし、りんくうプレミアムアウトレットモールもその恩恵にあずかっている）。

一方、南海岸和田駅前商店街は以前よりも人が減ったということであるが、調査に行ってみると意外と人が多いことが分かった。これはもしかすると、泉州地域で有名なお祭りであるだんじり祭が岸和田ブランドを維持するのに役に立っているのかもしれないが、今回はそこまで調査ができていないため他の機会に譲る。

現在の南海岸和田駅前商店街 図表 8



（筆者撮影）

## 6. おわりに

本稿は岸和田以南の南泉州地域の商業について先行研究を基に年代を区分してまとめたものである。このため、「はじめに」でも述べた通り、①近代商業勃興以前（江戸期まで）、②寺田家の勃興と商業の発展、③戦時期及び戦後の混乱期、④経済成長から関西国際空港開港までという区分で商業史をまとめた。この地域は大阪北部（旧摂津国）とは違い、資料が極端に少ない地域であった。また、市町村の垣根を超えた郷土史の研究があまり行われていない地域であった。ただ、本稿を執筆するのにあたって、江戸末期まで南泉州地域の主要な産業を廻船業とし、食野家や廣海家を取り上げた。もちろん、岸和田市にも商家は存在し、他の南泉州地域にも商家は存在したようであるが、全国的な影響力という点で考えると、この2家を取り上げることが妥当であると判断した。次の明治維新以降に関しては、地方財閥として全国的に有名となった寺田財閥を取り上げるのが妥当であると判断した。その後、第2次世界大戦が終わると、第2次産業としてはそのまま繊維産業が残るものの、商業として有力なものが存在しなくなってしまった。そこで調査の結果、着目したのが商店街である。

ちなみに今回、調査するのにあたって幸い地域の行政や住民の協力を得、岸和田市、貝塚市、泉佐野市を中心に行うことができた。特に地元の住人の協力で江戸時代廻船業で繁栄したさのまち場にある大將軍湯という銭湯オーナーの森さんにヒアリング調査をすることができた。これはさのまち場の過去や現在を知る大きな手がかりとなった。



しかし、最善の努力はしたものの本稿は筆者らの独断と偏見によって分類した部分があり、今後、資料等が発見されていけば、南泉州の商業に関する研究が進み、新たな区分が産まれる可能性があることを付け加えておく。

## 謝辞

本稿を執筆するにあたって、岸和田市教育委員会生涯学習部郷土文化室、岸和田市魅力創造部観光課、貝塚市教育委員会社会教育課文化財担当郷土資料室、草の根観光会議、在日コリアン青年連合の李明哲氏、日本基督教団島原教会の樋口洋一氏、大谷大学の鄭祐宗氏、泉佐野市の郷土史家、北山理氏に多大なご協力をいただいた。厚くお礼を申し上げ、感謝の意を表する。

泉佐野大將軍湯でのフィールドワーク 図表 9



(筆者撮影)

## 【補注】

<sup>1</sup> 岸和田市 HP

「<https://www.city.kishiwada.osaka.jp/soshiki/36/hanayaide.html>」2018 年 6 月 20 日確認。

<sup>2</sup> 中澤米太郎『泉州繁栄記：明治・大正・昭和前期の銀行編』大丸印刷、1977 年。

<sup>3</sup> 古田良一『東廻海運西廻海運の研究』東北帝国大学法文学部奥羽史料調査部、1942 年、35 頁。

<sup>4</sup> 柚木学「近世廻船業の発展とその運営：樽廻船の運送形態」『経済学論究 14(4)』関西学院大学、1961 年、127 頁。

<sup>5</sup> 池田谷久吉（佐野史談会）『食野家関係資料第一集、第二集』青文社、1950 年、1952 年。

<sup>6</sup> 北山理が参加して執筆している本には、「泉佐野観光ボランティア協会「1. 佐野町場編 さのまち場の歴史と今をひと巡り」『泉佐野観光ボランティア協会教本』（出版年不明）」、「佐野町場歴史散歩」編纂委員会『佐野町場歴史散歩』NPO 法人泉州佐野にぎわい本舗、2012 年。」「泉佐野商工会議所『泉佐野・田尻歴史探訪（泉佐野商工会議所創立 60 周年記念誌）』2010 年。」などがある。

<sup>7</sup> 勝矢 寛雄「泉州新風土記 泉佐野編(その 1)」『大阪明浄大学紀要 (6)』大阪明浄大学、2006 年、95-101 頁。

<sup>8</sup> 池田谷久吉（佐野史談会）『食野家関係資料第一集』青文社、1950 年、1 頁。

<sup>9</sup> 池田谷久吉（佐野史談会）『食野家関係資料第

一集』青文社、1950 年、1 頁。

<sup>10</sup> 池田谷久吉（佐野史談会）『食野家関係資料第一集』青文社、1950 年、1 頁。

<sup>11</sup> 貝塚市教育委員会社会教育課文化財担当郷土資料室によれば、廣海家の研究について、赤路洋子「幕末期泉州における米穀市場―貝塚・廻船問屋の分析を中心にして―」（脇田修編『近世大坂地域の史的分析』、御茶の水書房）、本城正徳『幕藩制社会の展開と米穀市場』（大阪大学出版会）、『商人の活動からみた全国市場と域内市場―天保期から第二次大戦期―』（科学研究費補助金研究成果報告書、研究代表者石井寛治）、中西聡『近世・近代日本の市場構造―「松前鯡」肥料取引の研究―』（東京大学出版会）、荻山正浩「産業化の開始と家事使用人」（『社会経済史学』64-5）、荻山正浩「第一次大戦期における米穀市場」（『土地制度史学』164）、中西聡「文明開化と民衆生活」（石井寛治・原朗・武田晴人『日本経済史 1 幕末維新时期』第 5 章、東京大学出版会）、山田雄久「明治大正期肥料商の北海道直買活動と人造肥料取引―大阪府貝塚廣海惣太郎家の事例をもとに―」（『経済史研究』＜大阪経済大学日本経済史研究所＞4）、石井寛治「維新时期大坂の手形市場―三井家と廣海家―」（『三井文庫論叢』36）、中西聡「近代日本における地方集散地問屋の商業経営展開」（『経済科学＜名古屋大学＞』49-4）、桜井英治・中西聡編『新体系日本史 12 流通経済史』（山川出版社）、中村尚史「地方資産家の投資行動と企業勃興」（『経営史学』38-2）、中西聡「肥料流通と畿内市場」

(中西聡・中村尚史編『商品流通の近代史』第 3 章、日本経済評論社)、石井寛治・中西聡編『商業化と商家経営—米穀肥料商廣海家の近世・近代—』(名古屋大学出版会)、伊藤俊雄「明治前期北前船運行における計画とコントロール—大阪府貝塚町廣海家の事例を中心に—」(『交通史研究』60)、中西聡『海の富豪の資本主義』(名古屋大学出版会)、中村尚史『地方からの産業革命』(名古屋大学出版会)、中西聡・二谷智子『近代日本の消費と生活世界』(吉川弘文館) などがあるということであった。しかし確認したところ、多くの研究では上方廻船業のデータの一部として扱われており、廣海家に関して深く分析している研究が少なかった。

<sup>12</sup> 赤路洋子「幕末期泉州における米穀市場—貝塚・廻船問屋の分析を中心に—」(脇田修編『近世大坂地域の史的分析』御茶の水書房) 1980 年、218 頁。

<sup>13</sup> 廣海家は前身となる明瀬家の家業を引き継ぎ、廻船業を営んだと考えられている。

<sup>14</sup> なお、廣海家は米穀肥料商と位置付けられている。米は秋田・新潟・石川・福井などから、肥料は江戸時代に青森近辺、明治時代に入ってから小樽・函館などと取引していた。

<sup>15</sup> 脇田修編著『近世大坂地域の史的分析』御茶の水書房、1980 年、250 頁。

<sup>16</sup> 貝塚の文化財

「[http://www.city.kaizuka.lg.jp/bunkazai/bunkazaidata/bunkazai/kuni\\_sitei/tourokubunkazai/hiromike.html](http://www.city.kaizuka.lg.jp/bunkazai/bunkazaidata/bunkazai/kuni_sitei/tourokubunkazai/hiromike.html)」2018 年 12 月 5 日確認

<sup>17</sup> なお、岸和田市を中心とした寺田財閥関係の資料としては、『岸和田市史第 4 巻』(以下、『市史』)にや『昭和に輝く』(原静村著 南海新聞社)、『元朝 寺田元吉』(中澤米太郎著 寺田元吉翁銅像建設委員会)、『寺田甚與茂翁小伝』(岸和田紡績株式会社社友会)、『元睦寺田翁』(熊澤安定著 市立商業学校編)、『茅渚の海から』(林幸司編集・文責『糸とはさみと大阪と』(大日本紡績、後のユニチカ)、『岸和田紡績株式会社 50 年史』『朝鮮人女工のうた』(金賛汀著 岩波書店)、松下松次氏が『資料 岸和田紡績の争議』(発行 ユニウス)などがある。

<sup>18</sup> 中澤米太郎『泉州繁栄記：明治・大正・昭和前期の銀行編』大丸印刷、1977 年。

<sup>19</sup> 新保博「国立銀行条例の成立」『国民経済雑誌 110 (3)』神戸大学経済学部、1964 年、87 頁。

<sup>20</sup> 新保博「東京為替会社 (一) — 維新期の信用

制度における—」『国民経済雑誌、107 (1)』神戸大学、1963 年、17 頁-34 頁。

<sup>21</sup> 新保博「国立銀行条例の一考察」『国民経済雑誌 110 (6)』神戸大学経済学部、1964 年、27 頁。

<sup>22</sup> 寺田甚与茂(てらだじんよも)1853~1931

「<https://www.city.kishiwada.osaka.jp/soshiki/3/terada-jinyomo.html>」2019 年 3 月 25 日確認

<sup>23</sup> 郷土史家北山理へのヒアリング調査による (2018 年 11 月 21 日)。

<sup>24</sup> 当時は鮮人住宅と呼んでいた。

<sup>25</sup> 朝鮮総督府庶務部調査課『阪神・京浜地方の朝鮮人労働者』朝鮮総督府、1938 年、30 頁。

<sup>26</sup> 朝鮮総督府庶務部調査課『阪神・京浜地方の朝鮮人労働者』朝鮮総督府、1938 年、30 頁。

<sup>27</sup> 青木昌吉、伊阪春「半島人部落に於ける衛生調査成績」『金澤医科大学十全会雑誌』第 42 巻第 10 号、1937 年 10 月。

<sup>28</sup> 当時は鮮服と呼ばれていた。

<sup>29</sup> 岸和田紡績の労働争議に関しては「ぼじゃぎねっと『フィールドワーク資料「海を越えて～岸和田紡績と朝鮮人女工さん」第 3 版』神戸学生青年センター、2014 年」に多く参考文献が掲載されている。

<sup>30</sup> 鄭富京、李相勁、樋口洋一編『玄界灘を渡った女性信徒たちの物語』かんよう出版、2015 年、ぼじゃぎねっと『フィールドワーク資料「海を越えて～岸和田紡績と朝鮮人女工さん」第 3 版』神戸学生青年センター、2014 年などがある。

<sup>31</sup> ユニチカ百年史「第 3 章小寺社長と戦時下の経営、4 岸和田紡績の合併」

「<https://www.unitika.co.jp/company/archive/history/pdf/nichibo03.pdf>」2018 年 12 月 5 日確認

<sup>32</sup> この運動によって、消費節約、貯蓄奨励、勤労奉仕、生活改善などが行われ、消費が冷え込むことになった。

<sup>33</sup> 工藤、剛治「戦後日本の階級構造と日本的経営」『経済学研究 59 (3)』北海道大学大学院経済学研究科、2009 年 12 月、18 頁。

<sup>34</sup> 国立公文書館デジタルアーカイブで閲覧可能 (2018 年 12 月 1 日現在)

<sup>35</sup> 持株会社整理委員会『日本財閥とその解体』持株整理委員会、1951 年、188 頁、276 頁。

<sup>36</sup> 美濃屋履物店 話者 川端志げ子より (聞き書き百人の佐野物語より)。

<sup>37</sup> 伊藤遼佑「阪和商店街に関する戦後からの変遷

について」、「闇市の形成と土地所有からみる新宿東口駅前街区の戦後復興過程—新宿駅近傍における都市組織の動態をめぐって その 1」日本建築学会計画系論文集 第 78 巻 第 694 号、2013 年、2627-2636 頁。

<sup>38</sup> 満菌勇「商店街の歴史にみる「消費」と「地域」：「商店街はいま必要なのか」を問う」『地域経済経営ネットワーク研究センター年俵』北海道大学、2016 年、97 頁。

<sup>39</sup> 満菌勇「商店街の歴史にみる「消費」と「地域」：「商店街はいま必要なのか」を問う」『地域経済経営ネットワーク研究センター年俵』北海道大学、2016 年、97 頁。

<sup>40</sup> 満菌勇「商店街の歴史にみる「消費」と「地域」：「商店街はいま必要なのか」を問う」『地域経済経営ネットワーク研究センター年俵』北海道大学、2016 年、97 頁。

<sup>41</sup> 泉佐野史には百人の佐野物語など、郷土史家による聞き書きがまとめられていて当時をよく知ることができる。また、それ以外には岸和田市史、貝塚市史、泉佐野市勢紀要などがある。

<sup>42</sup> 岸和田ボランティアガイドからのヒアリング

に基づく（2018 年 9 月 20 日）。

<sup>43</sup> なお、あべのハルカスの次に大きいのは横浜のランドマークタワーである。

#### 【参考文献】

大阪府高等学校地理研究会著『大阪—その風土と生活』二宮書店、1976 年。

柴田実『泉佐野市史（復刻版）』泉佐野市役所、1980 年。  
市勢紀要編纂委員会『泉佐野市勢紀要』泉佐野市役所市長室広報公聴課、1982 年。

桧本多加三『堺・歴史の枝折』堺商工会議所、2009 年 10 月。

泉佐野商工会議所『泉佐野・田尻歴史探訪（泉佐野商工会議所創立 60 周年記念誌）』泉佐野商工会議所、2010 年。  
佐野町場歴史散歩編纂委員会『佐野町場歴史散歩』NPO 法人泉州佐野にぎわい本舗、2012 年。

泉佐野観光ボランティア協会「1. 佐野町場編 さのまち場の歴史と今をひと巡り」『泉佐野観光ボランティア協会教本』泉佐野観光ボランティア協会（出版年不明）。